

2024年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

(A) ジェンダーフォーラム論文賞

対象: 学部学生・大学院生(個人・団体)	提出書類: ①ジェンダーフォーラム論文賞申込書* ②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
支給額: 優秀:10万円、佳作:5万円	備考: 執筆にあたってはジェンダーフォーラム「年報」投稿規定に従うこと。
採用件数: 1~4件	
選考方法: 論文審査	

書類提出期間: 2024年10月1日(火)~2024年10月31日(木) 23時59分まで

書類提出先: SPIRITSGmailより、ジェンダーフォーラムメールアドレス(gender@rikkyo.ac.jp)宛に提出書類を添付して提出

採用発表: 11月25日(月) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、10号館通路掲示板、立教時間、ジェンダーフォーラムHPに掲載。

授与式: 12月下旬(予定)

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書の利用目的】

標記の申込書で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することができる。

以上に同意した上で、申込書を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー:立教大学における個人情報の取扱いについて」(<https://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/>)に準じる。

※今年度の(B)活動・研究助成金の募集は終了しました。来年度は4月に募集予定です。

※申込書、願書はホームページ上からダウンロードできます。(<https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

※詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

2024年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金B奨学生決定!

今年度の(B)活動・研究助成金には4件の応募があり、5月14日に実施された選考委員会において、1件に助成金を授与することを決定いたしました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名(所属)	研究課題	支給額
山下 璃子(社会学研究科社会学専攻博士課程前期課程2年)	「日本におけるレインボーパレードの今日的状況を巡る一考察—中国地方4県を事例に」	15万円

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」とらわれず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会意識・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを開催しています。

開室日: 毎週月曜日~金曜日

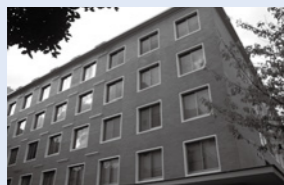
開室時間: 10:00~16:00

場所: 立教大学池袋キャンパス6号館1階

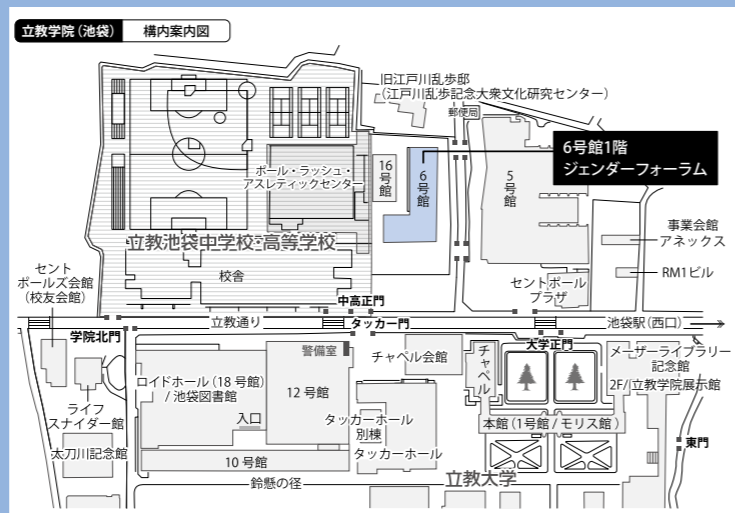
TEL: 03-3985-2307

E-mail: gender@rikkyo.ac.jp

URL: <https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>



6号館1階の入口付近です!



GEM

Vol.51 2024.10.01
Rikkyo Gender Forum News Letter



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

2024年度公開講演会(2024年6月6日(木))

「〈エコフェミニズム〉誕生50周年、その目指す社会とは」

登壇者: 萩原なつ子氏(本学名誉教授、国立女性教育会館理事長)、斎藤幸平氏(東京大学准教授)、森田系太郎氏(本学兼任講師/ESD研究所研究員)

1974年、フランスのフェミニストであるフランソワーズ・ドボンヌによって提唱された〈エコフェミニズム〉は、今年で50周年を迎えた。短くない歴史を持つ概念であるが、エコフェミニズムとは何かについて解説できる人はどの程度いるだろうか。私は登壇者の1人である森田氏が本学で担当する「環境人文学」という授業ではじめてエコフェミニズムという思想に出会ったが、理解するまでに相当な時間を要した。現在でも完全に理解できたと言える段階にはない。そのため、このエコフェミニズムをめぐる公開講演会で3名のお話を聞けるのは大変貴重な機会であった。

講演会では、萩原氏、森田氏、斎藤氏各々による講義の後、お三方による鼎談と質疑応答が行われた。本稿では前者の講義部分に的を絞りたい。1人目の登壇者であり、長年に渡って日本のエコフェミニズムを牽引してきた萩原なつ子氏は、フェミニズムとエコロジーを結びつけているのは〈支配〉という概念であり、人権意識に裏付けられた共生的な社会を実現するためには、男性が支配してきた意思決定の場に女性が参画することが必須であるとする。環境問題において意思決定の場から女性が排除されたのが宮崎県の土呂久鉱毒事件であり、萩原氏が深く入り込んで調査をしてきた沖縄県石垣市の新空港建設反対運動であった。一方、福岡県北九州市の「青空がほしい」運動は、生活に根差す女性の視点が生かされた公害反対・環境運動であった。しかし、そのような(女性)の視点を強調するエコフェミニズムは女性原理と母性主義を推進し、環境問題と女性性・母性を無批判に接続する“本質主義 essentialism”であるとされ、結果としてエコフェミニズム全体が批判に晒されることとなった。そのような批判を避けるため、萩原氏は戦略的に〈エコフェミニズム〉を「環境と女性」「環境とジェンダー」と言い換えたこともあったようだ。

2人目の登壇者である森田系太郎氏は、日本のエコフェミニズムの変遷、すなわち苦難の40年の歴史を第一波から第四波に区分して振り返り、次なるムーブメントである第五波への期待を、続く登壇者である斎藤氏へと寄せた。森田氏の時代区分のお陰で、エコフェミニズムをめぐる過去に日本でどのような議論があり、それらを経て現状に至ったのかが明確となり、後進の研究者にとっては財産になると感じた。

3人目の登壇者である斎藤幸平氏は、エコフェミニズムの視点と実践を再評価する立場をとる。斎藤氏は、伝統的マルクス主義の生産力主義、ヨーロッパ中心主義、男性中心主義、労働者中心主義、人間中心主義を克服することなしにはポリクライシス(=気候変動、パンデミック、戦争などが絡み合った複合危機)に立ち向かうような理論的基盤は提示できない、とする。エコフェミニズムという視点は、資本主義が女性の労働を無償(再生産)労働として搾取することや、植民地支配を通じて安価な労働力や自然が搾取されることを白日の下にさらす。エコフェミニズムは、不可視化されてきた構造を可視化してかつ転換を目指すものであり、伝統的マルクス主義のアップデートと脱成長との結合に欠かせないと言う。交換価値よりも使用価値を、独占よりもシェアを、「自分さえよければいい」から相互扶助 mutual careへ。エコフェミニズムがもつ〈ケア〉の視点は、斎藤氏が唱える脱成長コミュニティと深く結びつく。

スチュアート・ホール(2023)の言葉を借りれば、周辺化され不可視化されてきた経験の内側に、ジェンダーが取り換えようのないものとして存在している。その「周辺化され不可視化されてきた経験」のうち、特に環境問題に焦点を絞り、その経験の内側に存在するジェンダーとの結びつきを紐解く学問が〈エコフェミニズム〉なのではないだろうか。これが本講演会を通じて至った(私)のエコフェミニズムに対する解釈である。しかし、これでエコフェミニズムの全てを理解できたと高をくくらずに、これからも関心を持ち続けていきたいと感じた講演会であった。



参考文献 ヘル・フックス、スチュアート・ホール、2023、「アンカット・ファンク」(吉田裕・訳)、人文書院

森 亜由葉(本学大学院 社会デザイン研究科博士課程後期課程2年)

第 92 回ジェンダーセッション (2024 年 07 月 05 日)

「9/11 以降のアメリカのフェミニズム——ジュディス・バトラーとトニ・モリスンを手がかりに」

登壇者：五十嵐舞氏 (新潟県立大学国際地域学部講師)

講演会のテーマは、ジュディス・バトラーのプレカリティ論に対する批判的再考とトニ・モリスンの『ホーム』を踏まえ、9/11 以降のアメリカのフェミニズムで繰り返された「わたしたちはどのように連帯できるか」という問いについて考えることであった。答えである新たな連帯のアプローチとして、『ホーム』で見られたサラの態度が推奨された。講演冒頭では、バトラーが主張する哀悼による連帯の可能性に対して五十嵐から疑問が投げかけられた。五十嵐は、現地にいたアメリカ人記者のみに哀悼の意を捧げたアメリカ人達の事例を挙げ、共感の限界やゲイのアクティビズムの踏襲の不可能性を指摘した。そして、トニ・モリスンの話に入る。『ホーム』は、貧しい家庭で育った、朝鮮戦争に行き精神的に傷ついた兄フランクと、白人の雇い主から性的虐待を受けて子供を産めなくなった妹シーが再生する物語である。シーを迫害した医師の助手であるサラは、シーへの暴力に加担したことに気付き反省し、その行為を二度と行わなくなる。

ではなぜサラは自らの過ちに気づき、反省することができたのだろうか。五十嵐が出した答えはバトラーと重なる部分はあるものの、バトラーが主張するものとは異なっていたと思う。五十嵐は、作中に明確な答えは示されていないものの、シーと生活をともにし深く関わる中で彼女の容体を目の当たりにしたことで、初めて自身の行為の暴力性に危険を感じたのではないかと考えた。そして、サラはその衝撃に突き動かされ、シーの身に危険が及んでいることをフランクに知らせる手紙を書き過去との決別に至ると五十嵐は指摘する。つまり、サラが過去と決別するにあたり、理性より先に本能に訴えかけるものを感じる状態にあったと考えられる。これは、ある意味でバトラーと繋がっている。バトラーの、人という個体の内から根本的に湧いてくるものを原動力とするという着眼

点をおおた引き継ぎながらも、五十嵐は、原動力の内容を変えて新たなアプローチを見出している。すなわち、他者に目を向けさせるのがバトラーのやり方ならば、五十嵐は自己に目を向けさせることで悲劇を繰り返させまいとする抗議の可能性を示したのではないだろうか。

しかし、苦しむ当事者と交流を深め傷つた姿を目の当たりにしたサラのような立場には誰もが置かれるわけではなく、そのような経験を通じて新たな連帯へのアプローチをとることは難しいと考える人もいるだろう。そういったとき、五十嵐がとった、小説を読むという行為が手助けしてくれるのではないかと思う。小説を通して、普段、自分がよくいる場所から抜け出す時間をもつことができるだろう。もしかしたら、小説で、シーやサラのような存在に会えるかもしれない。

廣戸友香 (本学文学部教育学科教育学専攻 4 年 RikkyoPride メンバー)



現実を見るレンズ——フォーラム事務局着任の挨拶に代えて

私はジェンダーフォーラム事務局で働く傍ら批評家として、ライターとして、あるいはパフォーマンス作品をつくるアーティストとして、演劇をはじめとする舞台芸術やクィア表象に関わる活動をしている。ここでは着任の挨拶に代えて、フィクションと現実との関わりについて少しだけ話をしたい。

私が事務局に着任した 2024 年 4 月、NHK で連続テレビ小説『虎に翼』の放映がはじまった。伊藤沙莉演じる主人公・猪爪真子のモデルは日本初の女性弁護士となった三淵嘉子だ。物語は新たに公布された日本国憲法の第 14 条が読み上げられる場面からはじまる。「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」。太平洋戦争を挟んで社会のあり方やそれを規定する価値観は大きく変わったはずだが、人々が直面する問題は今に至るまで驚くほど変わっていない。2024 年の今も日本のジェンダーギャップ指数は 146 ヶ国中 118 位と極めて低い水準に留まったままだ。それは日本社会が、問題に直面している人々ではなく問題を作り出している人々が、自らのふるまいとその帰結としての抑圧に十分に向き合っていない結果だろう。この国で 41 年を生きてきたシス男性である私も「問題を作り出している人々」の一人であることは言うまでもない。

作中では真子をはじめとする女性たちの生と彼女らが直面する問題はもちろん、在日朝鮮人や同性愛者など、様々な社会的マイノリティの生と彼女ら彼らが直面する問題も描かれていく。それらはもちろん日本国憲法第 14 条で謳われる「法の下に平等」に関わるものなのだが、

全学共通科目 総合系科目「学びの精神」

ジェンダー平等を実現するため学ぶ！「人権とジェンダー」

私は、韓国で学部を卒業し、2017年から公務員として働いた。組織に入ったばかりの新入社員の時には、若い女性がお酒を注ぐべきだというセクシュアルハラスメントを聞いても、事務室での掃除やお皿洗いなどの仕事は、毎日、女性たちが順番にすることになっていても、昔からの企業文化ということで不快な気分を持ちつつ、何も言えなかった。しかし、2017年10月からソーシャルメディアで行われた世界的な「#MeToo運動」をきっかけとして、2018年からは組織の中でも、セクシュアルハラスメントや固定的性別役割分担が少しずつなくなるようになった。

また、その頃、学部時代に知り合った日本人の友達との会話の中で、「女子力」という言葉を知った。簡単にいうと「女性らしい態度や身だしなみ」を意味するこの言葉は、「女子力」が高い・低いと女性らしさを評価することで使われていた。だが、留学のため渡日した3年前から未だに「女子力」という言葉が、よく使われていることが見られ、一部ではなく社会全体のジェンダー意識が高まることは、まだ先のことではないかと考えた。

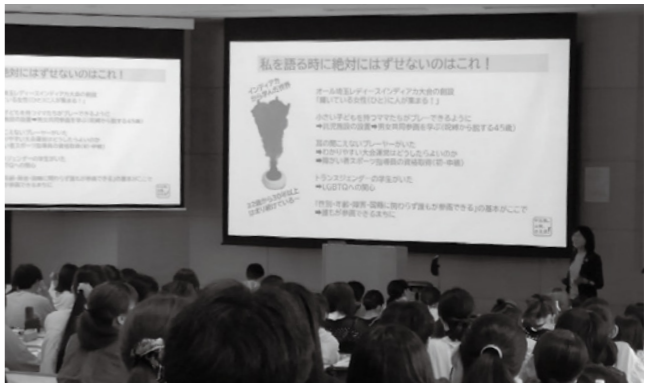
そのとき、「人権とジェンダー」の授業と出会い、「ジェンダー」について学びながら、自分の考え方を点検する良い機会ができた。

授業は、ジェンダーに関する基本的な知識を習得し、現代社会の様々な事象について人権とジェンダーの視点から考えることができるようになることが目的であり、内容としては、全部で4つのパートに分かれる。パート1では、フェミニズム、日本の男女共同参画の歴史からの人権の尊重とジェンダー平等推進、パート2では、ジェンダーギャップから考える日本の人権とジェンダー、パート3では、国際潮流から考える人権とジェンダーの課題、パート4では、グローバル化に伴う課題の共有と変容について学んだ。

そして最後に、これまでの学んだ内容をもとに、国連の掲げる持続可能な開発目標であるSDGsを念頭にし、自分が市民のひとりと

して何ができるかを考えた。まず、ジェンダー平等がSDGsのなかのひとつのゴール(ゴール5)で現れているだけでなく、実際には、複数のゴールにジェンダーの課題が繋がっていることで、ジェンダー平等はSDGs全体の目的であり、手段になることがわかった。そして、現代社会は、ひとつの性だけでつくられているわけでもなく、誰一人取り残さない平等な社会を目指すことで、男女共同参画など男女が共に意見やアイデアを出すことにより、今までの社会問題に対する改善点を多様な視点から探していけるのではないかと思われる。そのため、市民ひとりとして、自らのジェンダーを理解することだけではなく、他の人を尊重し、一緒に良い社会で住もうとする考え方を持つことがジェンダー平等への一歩ではないかと考えられる。

イ ユンジ (本学大学院観光学研究科 大学院生)



ゲストスピーカー登壇時の教室の様子

一方で脚本を担当する吉田恵里香が自らの X (旧 Twitter) で「私は現実にあるものを書いているだけ」「私は、透明化されている人々を描き続けたい」と発言していることは見逃せない。マイノリティは常にすでに現実中存在している。登場人物たちは日本国憲法第 14 条に関わるエピソードを描くために「登場」させられているのではなく、現実にもそのような人々が存在しているからこそフィクションのなかにも存在しているのだ。

フィクションには現実を見るレンズとしての機能がある。それはつまり、世界の見え方をよくも悪くも変えてしまう力があるということだ。見過ごされてきた問題や透明化されてきた人々を可視化することもできれば、偏った表象を通して現実の歪んだ像を生み出すこともできる。そもそも私たちは、それぞれが持つ一人一人異なるレンズを通してしか世界を認識することができない。そこには必ず、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、年齢等々に由来する固有の「歪み」がある。フィクションというレンズを通して現実を見ることは、自分自身の持つレンズの「歪み」と向き合うことでもあるだろう。

山崎健太 (ジェンダーフォーラム教育研究嘱託)